



BURST CITY 10

For Revolutionary Resistance

1994.3.20 No.

300円

A.R.P

ARP
P.O.Box57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

『我々には和平を求める既得権がある』

IRAインタビュー

IRA

以下のインタビューは、北アイルランド・ナショナリスト機関紙『An Phoblacht』／リパブリカン・ニュース紙と、IRA中央司令部とのインタビューである。

(5ページにアイルランド情勢についての解説)

《Q》現在、IRAの武装闘争路線がアイルランド和平交渉の大きな障害となっているという意見がありますが、これについてはどのようにお考えですか？

【IRA】和平の障害となっているのはアイルランドにおけるイギリスの存在と、その分割支配政策である。抑圧された者の抵抗闘争が和平の障害となっているなどとは本末転倒というものだ。この状況こそが、この島に暮らす人のみならず、隣の島（ブリテン島）の人々にとっても、和平への障害を生み出しているのだ。アイルランド人が何世代にもわたって「最後の手段」を選択せざるをえないように追い込まれてきた事実こそ認識されねばならない。

《Q》ロイヤリストの攻撃は、この数カ月間でますますエスカレートしてきました。ナショナリスト居住区に暮らす人々は、日々不安をつのらせています。この事態にIRAはどう臨まれますか？

【IRA】ロイヤリストの攻撃がエスカレートしているというのは残念ながら事実である。だが、ここにこそロイヤリストの暴力の本質がよく見てとれよう。ロイヤリストの殺し屋どもは、イギリス国家の雇われ犬である。英軍から情報、武器の両面で支援を受けているのだ。ロイヤリストがアイルランド云々、カトリック云々といった尺度を当てはめて、むき出しの宗派的憎悪のもとに行



動しているのは、だれもが認めるところである。

現在なされている政治キャンペーンは、すべてイギリスに有利なように仕向けられ、実際そう機能している。今、同胞の居住区にかけられているテロ攻撃は、1980年代半ばにイギリス国家の高度な政治レベルの場でなされた決定にもとづくものであることは、これまでのあらゆる事実が証明している。この決定とは、ロイヤリストによって編成された殺戮部隊の一層の強化、再武装化であった。これはイギリスの占領状態にある北アイルランド特有のものではなく、あらゆる植民支配地の下でおこなわれてきた戦術手法である。

ここで多くの点に注目しておく必要があるだろう。まず第一に80～81年、新たなスタートをきったナショナリスト勢力によるハンガーストライキ闘争連続決起の巨大な波に直面したイギリス国家は、その反動として未曾有

〈今号の内容〉

★IRAインタビュー

〈サパティスタ民族解放軍特集2〉

★1・6声明★1・12声明★1・13声明★農民革命法

★都市改革法★社会保障法★マルコス副司令官インタ

ビュー★その他



の弾圧体制をもってこれに臨んだ。そのメインとして、SAS（英軍特殊部隊）、英軍第14情報部隊の訓練をうけ、また直接の指揮のもとに任務を遂行するRUC（北アイルランド警察）／E 4 A殺戮部隊が編成された。

「ショット・アンド・キル」の合言葉のもとに、部隊はその殺戮手腕を一層錬磨させていった。これが公になり政治的に「高くつく」ことを憂慮した英政府は、この戦術を一時トーンダウンさせるようになった。そして今度は別の手段を使うようになる。イギリス国家直轄の公然殺戮部隊に代わる別の殺人装置として、UDA（アルスター防衛協会）やUVF（アルスター義勇戦線）の殺戮部隊が選ばれたのだ。ブライアン・ネルソンをはじめとする英軍エージェントらによって装備、情報が与えられていった。

我々IRAでは、多くのことが確認された。まずもってロイヤリストの殺戮部隊の活動には、それなりの特殊な手段をもってしか対応できないということだ。IRA兵士である我々は、いかなる状況となろうとも、イギリスの「宗派戦争」の袋小路に追い込まれてその手中に陥ることはない。我々がこれまでの闘いですでに示してきたように、これらロイヤリスト殺戮部隊には、もはや逃げ場はないのだ。つい最近も、我々はUVF（アルスター自由戦士）の軍事司令官をあぶり出し、追い詰めた。やつらがおこなってきた行為には、それなりのオトシマエをとらせるのが当然というものだろう。

《Q》爆破による経済的ダメージを狙った戦術が、失業率を増加させているなどとも言われており、また一部評論家は「両者にはすでに秘密のウラ取り引きが交わされている」などと言っていますが、これについては？

【IRA】北アイルランドの政治混乱状況は、イギリス

によりもたらされたものであり、その政策が果てしない失業者増加の原因だったのは明らかである。経済的ダメージを狙う爆破攻撃については、まずこれは我が部隊による数ある戦術の中の一方法にすぎず軍事的敵対勢力の撃破、または英軍本体を危機に陥れることを目的としているというのが第一点。そして第二に占領アイルランドにおける政治的危機状況を覆い隠すために、イギリスが国際舞台の場で張りめぐらしたカーテンをズタズタに引き裂き、大穴をあけ暴露していくものであるということ。第三に、ダメージを修復する費用のみならず、継続的に人員をこの地に投入していかなければならないことも含めて駐留費用が「高くつく」ことをイギリスのエリートどもに思い知らせるということである。

「宗派間の秘密のウラ取り引き」なるものについてだが、そんなものはまったく存在しない。爆破攻撃の基準は、標的の軍事的分析と地理的条件などによって決定されているのだ。

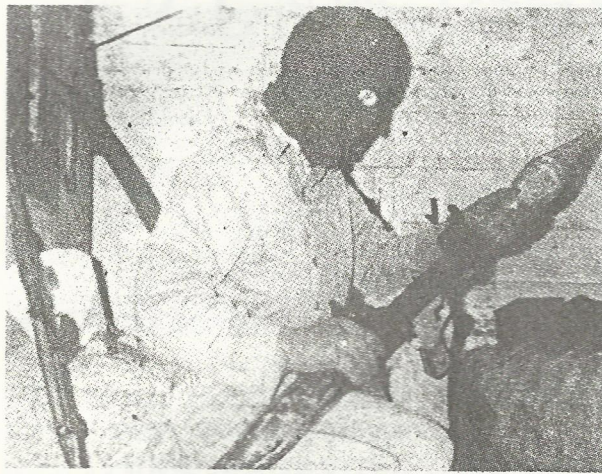
《Q》イギリスはこれまでにない規模で、その監視体制とパトロールを強化させていますが、これはIRAの軍事作戦遂行上、どの程度障害となっていますか？

【IRA】物資の面で強化して困難な状況を突破しよう、などと思うほど我々は愚かではない。これは敵の得策にはまるだけである。たしかに我々は、とりわけ80年代半ばからイギリスにより、人的、物的の両面で困難な状況にさらされてきたのは事実だ。

だが先にも述べたように、我々の揺るぎない決意と、我が勇士たちの英知、そして我々を支持してくれる人々の力は、敵の技術的、物質的優位状況にもかかわらず、敵に休息の余地を与えはしなかった。IRAが新たな戦闘戦術を展開していくたびに、イギリスは巨費を投じて防衛体制づくりをせねばならなかった。多くの「対抗手段」が時間を費やしてたてられはしたが、その新防衛体制もむなしく、IRAはただちにその弱点を見つけだし



武器を前にして会見するUDAロイヤリスト・テロ部隊



攻撃を加えてきた。イギリスに「退却」の2文字を強制してきたのだ。この例として、80年代半ばから後半にかけてのIRAの連続爆破戦術があげられよう。この作戦は、北アイルランド6州全域で闘われた。これにより英軍とRUCの拠点を含む、兵舎、倉庫の40以上が跡かたもなく吹き飛んでいる。これら英軍拠点に対しては、車両設置型時限式爆弾による爆破攻撃、さらにはMK10、ならびにMK11迫撃砲による砲撃戦闘などが80年代前半から連続的に闘われていた。

イギリスは5年間で数千万ポンドを投入して、全軍事拠点、兵舎を強化改築し、要塞化した。だが、IRA工兵部隊は、対兵舎攻撃用に、新型迫撃砲 MK15 を開発したのだ。これはティロン、ファーマナー、アーマーの各州に駐留する英軍拠点に対する攻撃に使用されている。また、先週、ダウン州での砲撃戦闘でも威力を発揮した。

我々の闘いで敵—イギリスが学んだことは、いかに物資が乏しかろうとも、技術、決意、そしてまさに勝利を獲得せんとする者の勇氣こそが重要なのだということだ。これはアメリカがベトナムで得た教訓と同じものであり英軍司令部自身、身をもって学び本国政府政治家にIRAの底力を報告してきたことからわかるはずだ。

《Q》IRAは、バルティック為替取引所やビショップスゲート規模の攻撃を引続き行う能力を持っているのでしょうか？

【IRA】バルティック為替取引所とステーブルズコーナーへの爆破攻撃は、イギリス政府役人どもの本拠地をズタズタに蹂躪する闘いであった。これら役人どもはプロパガンダでヘマをやり、メディアを自分たちに有利に展開させるのに失敗した。あるメディアには「イギリスはIRAの力を過少評価していたようだ…」と言わしめるに至っている。また直後にイングランドでは50件の連続爆破攻撃が敢行された。この中でも最大規模のものが、ビショップスゲート爆破であった。

これらロンドンをはじめ、他の都市をも戒厳下におかざるをえなくした我々の勝利的作戦は別として、実際には爆発しなかった爆弾も数多くあったことも認識してお

かねばならない。イギリスは「運」にまったく見放されたという訳ではないようだ。昨夏にはロンドンの主要施設6カ所を完全破壊する目的で準備していた爆薬18トンを手放さねばならない状況に追い込まれたこともあった。だがバルティック為替取引所施設への攻撃で述べたように、IRAの威力を過少評価するのは大きな間違いだろう。つい先週の攻撃でもわかるように、我々IRAは、必要とあらば、いついかなる場所でも作戦を遂行できるのだ。

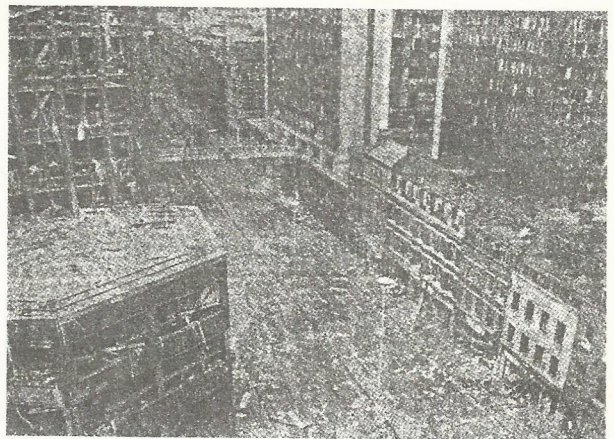
この場をもって再度、爆破警告の問題について明らかにしておく。IRAは昨年について言えば、作戦遂行にあたって5件の爆破警告を事前におこなった。これは、警告をないがしろにするイギリス政府当局に猛省をうながすことを目的としていた。これは例えば北ロンドン第4鉄道橋梁への爆破攻撃で、我々の警告を隠蔽しようとした英当局の工作にも見てとれよう。この時IRAは正確な爆破予告をおこない、これに英当局がどう対応するのかを調べるため、同鉄橋周辺を終始、監視していた。警告に従った検索がなされなかったため、さらなる警告をダブリン経由で発した。爆破約1時間前であったはずだが、スコットランドヤード／警察当局は何ら対応をとらなかったのだ。我々はくり返し言うておく。そのような安直な政策は、いまずぐやめるべきだ。

《Q》一部評論家によれば、IRAが北アイルランドにおけるイギリスの存在をみとめつつ、軍事目的を達成すれば、ある意味で南部アイルランドが不安定となるなどと言われていますが、これについては？

【IRA】この手の類のコメントは、まともに取り合うべき事柄ではない。IRAは、その軍規律において、この点について歴史的にはっきりと明記してきている。IRA軍法規第8—第1節には、次のようにある。

「IRA義勇兵士は、いかなる状況であろうとも26州兵士との一切の軍事交戦をしてはならない。」

第4節には、「いついかなる時でもIRA義勇兵士は、その任務がアイルランド占領英軍の排除こそが目的であるのだということを忘れてはならない。」とある。



93年4月、IRAの爆破攻撃により、英帝中枢・ビショップスゲートのビルの窓ガラスは粉々に吹き飛んだ。

この法規は86年IRA軍事総会で再採択されたものである。この、これまでの方針は今後も変わることはない。

《Q》IRAが恐喝組織であるとか、麻薬取り引きなどのあらゆる犯罪に手を染めているなどとこれまで何度も言われてきましたが、これについては？

【IRA】断言するが、IRAが恐喝やゆすりをおこなっているなどとする記事はまったくのデタラメである。こういったデマは、ダブリンのマスコミ陣、とりわけ「プレスレポーター誌」あたりが、一部ジャーナリストらとともにタレ流しているものだ。彼らは自分たちのおこなっていることをよく認識しておくべきだろう。ニセの「証拠」を積み重ねて大きなデマをつくり上げていくジャーナリスト、ユニオニスト勢力の手先というだけではない。やつらはリズバーンのシーフパル駐留英軍から見返りをもらって記事を配信しているGARDA（アイルランド警察）の記者クラブを拠点に活動する札つきのジャーナリストたちなのだ。

元英軍広報担当官コリン・ウォレスでさえ「これら定期的になされるプロパガンダは必ずや人々の心の奥底に蓄積され、成果を生むことだろう。」と証言している。

個別の事例について触れれば、これらデマはどれも事実をすら根拠とせずにつくり上げられたものである。これらジャーナリストを放置しておけば、ナショナリスト同胞が、いつか必ずこのデマによって裁判で有罪とされてしまう事態がおきることだろう。

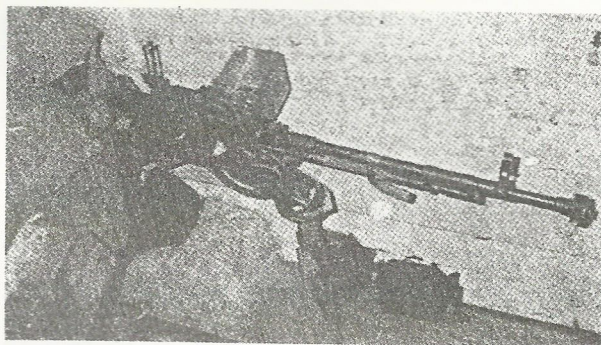
《Q》アダムズ／ヒューム会談（訳註①）についての見解は？

【IRA】10月3日、IRA指導部はアダムズ／ヒューム会談についての声明を発表している。それ以上のことをここで私が述べるのは適当ではないだろう。声明には以下のようにある。

「IRA司令部はこの会談を歓迎するものである。ダブリン、ロンドン両政府が踏まえねばならない『大原則』を我々は認識するものである」。

「だが、この会談に対するイギリス政府の対応はというに残念ながら否定的なものであり、これはユニオニスト

イギリス軍の武装ヘリを撃墜するための重機関銃



の反応と軸を一つにするものであった」。

「しかしながら、もし、政治的意志といったものが存在し、あるいはこれが創出されれば和平の基礎が提供されることとなる。我々、すなわち我が義勇兵士と、その支援者には長きにわたって継続的な和平を求める既得権がありつづけた。我々の目的はアイルランド人による民族自決権問題も含め、今や広く公けに知られるものとなっている。この我々の決意は不変のものである」。

《Q》それら一連の状況をふまえ、IRAが武装闘争を中止するのではという観測もあったようですが。

【IRA】武装闘争中止に関するIRAの立場は、前々からはっきりとしている。アダムズ／ヒューム会談については、先にも述べたように、もし政治的意志が存在し、あるいはこれが創出されるならば、事態は前向きに進展していくであろう。我々の側から言えば、我々IRA、そしてその支持者らには、アイルランドに正義を確立し和平を達成するための意欲がずっとあったのだ。

しかしながら、くり返して言うが、これに対するイギリスの反応はというと、否定的なものばかりであった。パトリック・メーヒュー（北アイルランド担当相）の最近のコメントを見ても、これは明らかである。また、10月8日、首相メージャーが英保守党大会で「アウト！アウト！アウト！」（訳註②）と息まいた演説からもわかるように現政府も過去の政府のとってきた誤った政策を踏襲しているにすぎない。

イギリス政府は、我々すべてを、継続的な紛争状態下（次ページ左下につづく）





《解説》イギリスこそが和平の障害となっている

昨年から北アイルランドに関するイギリスとアイルランドの交渉が進展し、北アイルランドの和平についてマスコミも何度か取り上げて来た。新聞の紙面は、一様にIRAが武装闘争を放棄しないことが和平の進展を妨げているとしている。しかし、これは、完全にイギリスの立場に立ったプロパガンダ以外の何物でもない。北アイルランド問題について理解を深めるために、若干の歴史的経過から追ってみよう。

※

ケルト人を祖先とするアイルランドは、統一国家を持たず、イギリスの植民地支配時代を経て、1800年にはイギリスに合併された。20世紀に入って自治の要求が高まり、自治法の成立を妨害するイギリス政府に対し、1916年にはアイルランド義勇軍による一斉蜂起が起こる。こ

れは敗北するが、独立への意志はかえって強まり、イギリスへの抵抗運動が強化される。蜂起に際して軍事的なイニシアチブを握ったIRB（アイルランド国民防衛隊）が、のちにIRAとなり、武装闘争の主導的な位置を占めることとなる。1919年にアイルランド議会は独立宣言を発し、2年にわたる独立戦争が開始される。イギリスはこれに対抗して、翌年アイルランド統治法を成立させて比較的イギリスの影響の強い北アイルランドをアイルランドから分割しようとした。これが、今日の北アイルランド問題の発端となる。アイルランド政府は、強大なイギリスの軍事力を前にして、当面の独立を達成するために北アイルランドにおけるイギリスの覇権を認める条約を締結し、北と南に二つの政府が生まれることとなった。IRAは、これに反対し、あくまで統一アイルランドを求めた。

イギリスの植民政策の結果、少数派となったカトリック教徒は北アイルランド社会の底辺に無権利状態で落とし込まれて来た。1960年代のアメリカでの公民権運動の盛り上がりや革命運動の拡大の中で、北アイルランドでも権利の要求や統一を求める運動が展開される。これ

（前ページからつづく）

におき、非難しつつけるつもりなようだが、こういった類の幻想を抱くのはやめにしてもらおう。彼らは紛争状態解決へ向けて、我々が準備できる環境をこそ、用意していくよう努力すべきである。

《訳註》

▷訳註① アダムズ／ヒューム会談

シン・フェイン党（IRAの政治組織）党首ジェリー・アダムズとSDLP（社会民主労働党／カトリック穏健派）代表ジョン・ヒュームによる会談。北アイルランド和平交渉開始の「土台づくり」として注目された。

▷訳註② 「アウト！アウト！アウト！」

1984年7月、北アイルランドの政体のあり方について3つの可能性を提示したニュー・アイルランド・フォーラムの報告書がアイルランド、イギリス両議会に提出された。前首相サッチャーは、この3つをそれぞれ「アウト！」（＝駄目！）として一蹴し、以来、この発言は有名となった。



ベルファストなどでは、いたるところにIRAのスローガンが書き印されている。



に対して、イギリス政府、軍、プロテスタント準軍事組織が流血の弾圧を加え、多くの血が流された。殺すために殺到するイギリス側の武装勢力に対して、無きに等しい武器で対抗し、住民の生命を守ったIRAは住民の圧倒的な支持を受けたのであった。そうした弾圧支配に対する防衛的措置として、IRAは武装闘争を強力に展開することとなる。住民の抵抗運動が強まる中、イギリス政府は1972年にアイルランドを直轄統治に戻した。

北アイルランド問題について考えるとき、まず前提として押さえておくべきものは、イギリスによる北アイルランドの占領支配ということである。ここから全ての問題を立てなければならないだろう。ともすれば、宗派の争いに一元化されてしまいがちであるが、原点はアイルランドの一部をイギリスが占領していることにあるのだ。

※

昨年、IRAの政治組織であると言われるシン・フェイン党のアダムス党首と社会民主労働党のヒューム代表が会談し、北アイルランドの和平についての骨子的な合意を交わした。この和平への動きに危機感を強めたイギリス政府は、9月からのアイルランド政府との和平交渉の再開によって、北アイルランド和平を自国に有利に展開するよう、すなわち北アイルランドへの支配権を失うという事態を回避するべく、動きだした。これは、昨年12月のイギリス・アイルランド両政府の共同宣言として結実する。同時にイギリスは、和平の障害はIRAの武装闘争であるという宣伝を押し進めた。日本の報道では、このイギリスのパフォーマンスのみが拡大して報道されており、和平の障害はIRAの武装闘争だという偏った見方がされがちである。

和平への動きの端緒を作り出したのはIRAであり、これをイギリスが阻害していることは明白であろう。アイルランド政府との共同宣言においても、和平への過程が明らかにされたわけではない。全てがあいまいなままイギリス政府の宣伝に利用されているのが現状である。アイルランドの憲法には、北アイルランドはアイルランドの一部であることが明記されており、これをどう処理するかについて、現在のところイギリスとアイルランド政府に妥協が成立する余地は少ないと言えよう。にもかかわらず、今回の和平に向けた共同宣言をイギリス政府が自己の宣伝に最大限に利用しようとするのは、北アイルランドの占領という既成事実を死守せんとする領土的

な野望以外の何物でもない。

今年の2月、アメリカ政府は3日間という限定付きではあるが、シン・フェイン党のジェリー・アダムスの入国を許可した。アダムスは、精力的にアメリカのマスコミはもちろんのこと、議員など関係者と会談して和平についての基本的な姿勢を明らかにした。このことは、シン・フェイン党そしてIRAが、北アイルランドの和平について欠くことのできない存在であることの証左でもあった。しかしながら、イギリス政府はアメリカ政府に抗議し、シン・フェイン党の言論そのものを阻害しようとする姿勢を取りつづけた。

イギリスでは、シン・フェイン党の関係者の発言をマスコミでそのまま流すことが禁止されている。このため、メディアにおいては、発言が吹き替えて報道されているのが現状である。この何とも奇妙な状態は、言論さえも抑圧してしまうイギリス政府の姿勢と、マスコミの苦肉の策の結果としてある。結局のところ、イギリス政府には和平の当事者と真摯に話し合おうという姿勢がないとしか言いようがない。このことから、テロを放棄しなければ和平の話し合いに参加させないという理不尽な要求が、イギリス政府の北アイルランドでの影響力を失うくらいなら和平など結局のところ必要としていないのだという本音に根ざした詭弁であることは、容易に想像出来よう。

北アイルランドでは日常的な英国軍による検問、搜索体制が敷かれており、街の至る所に銃を構えた兵士が溢れている。(これは、観光で行った人に聞けばよい)。毎年何十人もの人が英軍に殺害されており、銃を突きつけられるのは観光客として例外ではない。相手に銃を突きつけながら、お前がまず武器を棄てろと言っているのが、現在のイギリス政府の姿勢である。

EZLNと交渉の場を持ったメキシコ政府のような対応は、「大英帝国」の「プライド」に触れるのかも知れない。

(編集部・K)



ベルファストなどに展開する完全武装のイギリス軍

サパティスタ民族解放軍 特集 2



農業革命法

メキシコにおける貧困農民は、自らがそこで働くことのできる土地を取り戻すために戦っている。エミリオ・サパタの理念を引き継ぎ、メキシコ憲法第12条改悪に反対し、EZLNは土地と自由のためメキシコの農村での真の闘争を再び始めるのである。革命によってメキシコ全域で成し遂げられる農地の分配の規格を定める目的をもって、以下に掲げる革命的農業法を制定する。

第1条：この法はメキシコ全土にわたって効力をもち、政治的立場、宗教的信条、性別、人種、皮膚の色にかかわらずメキシコの貧農や農業労働者すべてに恩恵をもたらすものである。

第2条：この法は、国家のもしくは外国の所有を問わず、メキシコ領土内の全ての農地と農牧業に及ぶ。

第3条：やせた土地 100ヘクタール以上、もしくは肥沃な土地50ヘクタールを超える面積を持つ土地のすべてがこの革命的農業法の適用の対象となる。そして、上記の限度を超える土地財産を持つ者はその超過分がこの法によって没収され、最小限の土地が残される。彼らは小地主として残るか、もしくは、農業組合運動、農民共同体、コミュンに参加することとなる。

第4条：農村の共同地、または人民共同組合の土地は、この法の第3条に規定したところの制限を超えるものであっても、農業改革の適用の対象にならない。

第5条：この農業法の適用を受ける土地は、それを協同組合、農業共同体、農産物、家畜の集産体の形成のための共有財産として求める、土地を持たない農民や農業労働者に分け与えられることとする。適用を受けた

土地は共同して耕作されねばならない。

第6条：土地を持たない貧困農民、農業労働者、そして土地所有権を持たない、または土質の低い土地しか持たない男女、子供の集産体は、まず第一に土地を要求する基本的権利をもっている。

第7条：貧困農民や農業労働者に恩恵をもたらす土地の開墾のために、大農園や農牧業独占企業体は没収される。同様に機械、肥料、貯蔵施設、財源、化学製品、技術顧問事業といった生産手段もその対象とされねばならない。そしてこれらすべての生産手段は、共同組合、集産体、共同体として組織されたグループを特別に配慮しながら貧困農民や農業労働者の手に引き渡されねばならない。

第8条：この農業法によって利益を受けるグループは、共同体の生産物である以下に上げる食料を、それを必要としているメキシコ人民に供給しなければならない。とうもろこし、豆、米、野菜や果物、さらに家畜である牛、豚、馬や養蜂とともにその副産物（肉、牛乳、卵等々）も含む。

第9条：戦争時において、この法の適用を受ける土地の農産物の一部は革命兵士たちの残された家族たちを養うことと革命軍の支援に充当される。

第10条：共同生産の目的は、まず第一に人民の必用性を満たすことである。また、この法によって恩恵を受ける人民に共同の労働や利益という意識を啓蒙し、メキシコの地に生産、防衛、相互扶助の単位を創り出すことにある。

ある地域で、生産不可能な農産物がある場合は、それを生産している他の地域と正当かつ平等な条件で交換される。余剰生産物は、メキシコ人民の需要がない

限り国外に輸出することができる。

第11条：大農園は没収され、メキシコ人民の手に引き渡された後、その本人である労働者によって共同管理される。耕作機や種まき機といった農作業の手間を軽減するための農機具は、農村共同体に配給され、それらは土地の肥沃化と人民の飢えを根絶するために使用されねばならない。

第12条：土地や生産手段の私的独占所有は認められない。

第13条：未開発ジャングル地帯や森林地帯を保護し、主要な地区において再植林キャンペーンをしていくこと。

第14条：水源地、河川、湖や海はメキシコ人民の共有財産であり、汚染を防ぐよう配慮されねばならない。

第15条：この法による農地分配の確立に加えて、貧困農民や土地を持たない農業労働者のために、公正価格で農民の生産物を買上げ、充足した生活のための農民の必需品を適性価格で販売する商業センターが造られる。

もちろん、近代医学、有能で良心的な医者と看護婦を備え、人民が無償で医療を受けられる地域医療センターが設立される。

農民とその家族がバーや売春宿を必要としない品位をもって憩えるレクリエーション・センターが設立される。

年齢、性別、皮膚の色、政治的立場にかかわらず、農民とその家族が教育を受けることができ、また農業の発展のための必要な技術を習得するための教育センターと無償で通うことのできる学校を設立すること。

農民が充実した生活と交通のため整備された道を獲得するために、技術者と建築家の協力のもと、住居と土木整備建設センターを設立すること。

農民とその家族が、電気、水道、排水施設、ラジオ、テレビ、そしてさらに家庭に必要な暖房機具、冷蔵庫、洗濯機、製粉機等々の設置を保証するためにサービス事業センターを設けること。

第16条：共同体で働く農民は税金を徴収されない、同様に農牧地、共同組合地、共同用地も税の対象とならない。革命的農業法が施行されるその日から、抑圧的政府、外国人、資本家から貧農と農業労働者が借りている信用貸、税金、貸付金といった全ての負債は撤廃される。

都市改革法

E Z L Nの管理する都市部においては、住居をもたない家族全てに品位ある住宅を保証するために、以下の諸法が制定される。

- (1)自身の持ち家もしくはアパートを所有している居住者は、全ての税の支払いを中止することとなる。
- (2)同じ住宅に15年以上居住し、賃貸料を支払っている居住者は、革命政府が勝利して新しい法律が制定されるまで、家主への賃貸料の支払いを中止することとなる。
- (3)賃貸料を支払い同じ住宅に居住して15年未満の居住者は、その家族の長が労働して得る賃金の10%だけを賃貸料として支払い、その住宅に15年以上居住したあと

は支払わなくて良くなる。

(4)すでに公共事業が整っている都市区画においては、その区画に住居を建設することの目的のもとに、例えば住居が仮設のものであっても、ただちに入居用として解放されることとなる。自由かつ民主的に選出された当局が、これらの入居を通知することとなる。

(5)人の住んでいない公共の建物と大邸宅は、数家族で分割して臨時に使用される。これを促進するため、市当局は、地域の委員会を任命する。委員会は、提出された要望に基づき決定を下し、必要性そして利用できる資産であるかの基準のもとに、居住空間を保証するであろう。

裁判法

(1)殺人、レイプで有罪の者、麻薬取引・売買の首領たちを除いて、刑務所に収容されている全ての囚人は釈放される。

(2)自治体の首長から共和国大統領に至るまで、全ての官吏は監査を受けることとなる。そして、有罪の証拠が発覚した場合には、公金横領で裁かれる。

社会保障法

第1条：身寄りを失った子供は市の施設に引き渡される前に、E Z L Nの責任のもとに、近しい隣人のもとで保護され、食料を供給されねばならない。この保障は孤児が13歳に達するまでの間とする。

第2条：家族のない老人は保護され、無償で住居を提供され、食料配給票が配布される。

第3条：戦争によって不治の障害を被った者は、E Z L Nの責任下で、介護され、優先的に職を与えられるものとする。

第4条：退職者の年金は、物価一賃金（調整）地方委員会などによって定められた最低賃金に見合った額とする。



EZLN総司令部 1.6声明

「続出する死者、繰り返される死。しかし今、遂にやってきたのだ、生きる時が。」

メキシコ人民よ！
世界の人々、そして政府へ
兄弟たちよ！

本年1月1日、我がサパティスタ民族解放軍は、あまたのメキシコ人民、とりわけ先住民族の悲惨な生活状況を、全メキシコ人民および世界の人民に知らしめるという基本目標をもって、一連の政治的武装行動を開始した。また、これは基本的権利のために戦うという我々の決意をも人民に知らしめるものである。政府権力が我々に残した唯一の方法、すなわち武装闘争という方法によって。

我々の同志、メキシコ人民が暮らす極貧状態には、ごくありふれた理由がある。自由と民主主義の欠如である。絶対的な自由の尊重と人民の民主的意志の獲得要求は、メキシコの略奪された生活における経済および社会状態の改善のために不可欠なものである。

こうした理由で、我々はメキシコ人民の生活状態の向上と、自由および民主的政策の要求のために叛旗を翻すのだ。この目標とならび、カルロス・サリナス・デ・ゴルタリによる不法な政府の廃棄と、民主主義移行のための新政府結成をも要求する。それは、政府の全レベルにおける公正な選挙を保障するものとなるだろう。繰り返す述べたい。我々の政治的経済的要求の正当性を、そしてその行為によって、メキシコ人民とあらゆる自立的組織との統合を試みているのだということを。そのため、あらゆる種類の闘争を通じて、民族革命運動は、メキシコ発展のために、誠実さと愛国的社会組織が成立することを念頭に、組織されているのである。

この自由のための闘争の最初の段階から、我々は抑圧的な政府関係者や政府軍からの攻撃のみならず、連邦政府や州政府から、そしてマスコミからの中傷を受けてきた。それらはメキシコ人民に、この闘争は外国人やいかがわしい目的をもったプロのテロリスト、そして個人の利益目当ての非愛国者によって支えられているものなのだ、と伝えることにより、闘争を失敗に終わらせようとするものであった。こうした中傷や偽りのために、我々EZLNは以下の点について明白にせざるを得なくなったのだ。

(1)EZLNでは、戦士および司令部に外国人は所属していないし、外国政府や他国の革命運動団体からのいかなる指示、援助も受けてはいない。ニュースでグアテマラ人が我が軍のために働き、隣国で軍事訓練を受けたと報じられたが、それは、政府が我々の運動を陰険な手段で傷つけるために捏造したものなのである。かつて、そして今も、エルサルバドルのFMLNやグアテマラのURGN、そしてラテンアメリカ、北米、ヨーロッパ、ア

オコシゴ近郊の山中にて



フリカ、アジアにおけるいかなる武装団体とも、何の繋がりも持っていない。戦略については、中央アメリカの叛徒からではなく、メキシコの戦歴から学んだ。例を挙げると、イダルゴやゲレーロ、ミーナの闘い、1846年から1847年のアメリカによる侵略に対するレジスタンス、フランスの干渉に対する民衆の抵抗、ヴィジャとサパタの勇敢な戦い、そしてメキシコ史を通じて行われてきた先住民族の抵抗運動などである。

(2)我々EZLNは、カトリックの宗教的権力およびいかなる教義とも関与していない。あらゆる教会組織や、チアパス州の司教管区、ローマ教皇大使、バチカンその他からの、指導、指示、支援をも受けてはいない。戦士たちは元々カトリック教徒によって構成されるが、他の宗教の信者もいる。

(3)EZLN戦士の多くは、チアパス州の先住民族である。なぜなら先住民族は、メキシコにおいて最も貧しく、かつ屈辱を受けている地域を代表しているからである。そしてまた、ご存じのとおり、最も誇り高くもある。我々は、何千もの武装先住民族集団であり、その背後には何千もの親族がいる。したがって、この闘争には何千何万もの先住民族が参加していることとなる。政府はこの闘争を先住民族の蜂起ではないとしているが、我々が思うに、これだけ多数の先住民族が抗議のために立ち上がっているというのは、まさしくそのものであるとは言えまいか。加えてこの蜂起への参加者の中には、他の社会的身分にあるメキシコ人や、メキシコ内の他の州に在住する者たちもいるのだ。そういった人々は、先住民族が受けた搾取に対し異議を唱えるからこそ、我々の主張に同意し、参加してくれているのである。こういった非先住民族のメキシコ人たちが参加したように、その他の人々も参加してくれるだろう。何故なら、この闘争はメキシコ国民の問題であり、チアパス州だけに限られるものではないからである。現在のところ、この闘争の政治的リーダーシップは全面的に先住民族によるものである。全戦闘地域内のCCRIメンバー全てが、ツォツィル、ツォルタル、チョル、トラホバル他の先住民族の者である。未だにチアパス州先住民族の全てが参加しているわけではないのは事実である。何故なら数多くの仲間たちが依然として政府の意向や偽りに惑わされているからで

ある。しかし我々は既に大組織なのだから、そろそろ目を向けるべきなのではないか。顔面を覆うマスクの使用は、基本的には安全のためであり、そして政府の地方指導者に対する一種の免疫づけのようなものである。

(4)使用している武器その他は多様であり、至極もっともなことながら、その全容はマスコミや、1月1日、2日に占領した地域の住民には公にしていらない。これらは少しずつ徐々に収集され、軍の貯えとして10年間にわたって密かに準備されてきたものである。我々の所持する「洗練された」、意志伝達のための武器は、輸入兵器を扱う商店で見つけることが出来た。武器獲得のために略奪に奔ったりしたことは一度もない。我々は常に、メキシコ中の誠実に憤ましい人民によって供給された武器に頼ってきたのである。武器獲得のために決して強奪に頼らなかったのは、10年にわたる切実で慎重な準備期間中、抑圧的な州組織が我々の行動を探らなかったからである。

(5)そのような準備がしばらくの間出来ていながら、なぜ今、行動を起こしたのかと尋ねられたことがある。以前、平和的かつ法的な手段を試みたことはあった。しかし、それは何の結果も生み出しはしなかった。この10年間に15万以上の我々先住民族の兄弟たちが治療可能な病で亡くなった。国や州、地方の政府経済や社会計画は、我々の問題に対していかなる現実的な解決案をも検討してくれなかったし、選挙が始まる度に我々への援助を制限していったのである。その援助物資もほんの僅かの期間で底をつき、またもや死が我々を脅かすようになっていった。こういった経緯から無駄な死に業を煮やし、変革のために闘うべきだと考えたのである。たとえ今、命を落とそうとも、それはもはや恥ではなく誇りである。我々の祖先がそうであったように…。死にゆく準備はできている。もし必要ならば、もうあと15万人死んだって構わない。政府に与えられた嘘偽りの夢の中から、人民を目覚めさせるためならば。

(6)政府が押しつけようとしている「和解」条件は、我が組織には容認できないものである。今回の蜂起開始時に提示した要求を満たすまでは、武器を置くつもりはない。当初の対話で要求したのは以下のような条件である。

- A) E Z L Nを交戦中の武装戦力として認めること。
- B) 戦闘地域全域における停戦。
- C) 政府軍の全集落からの撤退と、その地域住民の人権の全面的な尊重。政府軍の、国内特定地域における兵舎からの撤退。
- D) 地域住民に対する無差別爆撃の停止。
- E) 先に示した3条件に基づく国民調停委員会の結成。

政府がこの条件を尊重するならば、我々も尊重することを約束しよう。ただし、そうでない場合には、我が軍はメキシコ首都に向けて進み続けるまでである。

E Z L Nは、繰り返し述べよう。我々はジュネーブ協定に基づく戦争法規に従う所存であり、地域住民、赤十字、マスコミ、負傷者、我が軍と闘わずして降伏した政府軍を尊重するということを。

北アメリカ国民、政府に対して、特にお願いしたいことがある。まず国民には、我々同胞のための団結と支援

アルタミラノで政府軍を迎撃するE Z L N戦士たち



を、そしてアメリカ政府には、メキシコ連邦政府に対する経済的および軍事的支援の中止を請願する。なぜなら、人権を全く無視したメキシコ政府は、その援助を人民大虐殺のために利用するつもりだからである。

メキシコ人民へ

1月5日までの軍事的形勢は以下の通りである。

- 1. E Z L N側死傷者：死者9名、重傷者20名。彼らは現在野戦病院で治療を受けている。軽傷の後、戦闘復帰した者多数、行方不明者123名。以上の数には、連邦軍当局によって残酷な処刑を受けた者は含まず。我が軍がオコシンゴで戦闘を開始して以来の負傷者数は不明。
- 2. 政府軍（含警察官、連邦軍兵士）死傷者：死者27名、負傷者40名、捕虜180名。ただし降伏後無傷で釈放された。不確定ではあるが少なくとも更に30名以上が死亡。これらに加え、1月4日のサン・クリストバル・デ・ラス・カサスの南部山岳地帯における政府空軍機による、作戦行動中の政府軍戦闘トラックへの爆撃に伴う負傷者多数。ただし人数は不明。
- 3. 破壊と損害を受けた政府軍の軍事物資：攻撃ヘリコプター3機（1機はオコシンゴで、2機はサン・クリストバルで）。爆撃機3機（全てサン・クリストバルで）。無線巡回車両15台。州司法警察留置所4カ所。
- 4. 囚人の解放：E Z L Nは4つの刑務所（サン・クリストバル2、オコシンゴ1、ラス・マルガリータス1）を襲撃し230名を解放。
- 5. 捕獲した兵器：種々雑多な口径の銃器、107丁（M-16、G-3、M-2、グレネード・ランチャー、ピストル、ショットガン）。あらゆる口径の弾薬多数。ダイナマイト1266kg、TNT雷管1万個。移動用車両20台以上。警察、陸軍、空軍使用の無線装置多数。

国内外の報道関係者各位

誠実なる国内外の報道関係者の方々に、政府軍がサン

・クリストバルやオコシゴ、アルタミラノ、ラス・マルガリータスといった市町村および近隣の街で行なった大量虐殺についてお知らせしたい。それは政府軍による地域住民への無差別虐殺であったにも関わらず、後日E Z L Nの蜂起による犠牲者であると発表された。政府軍が、死んだと報じた何人かのサパティスタ軍兵士たちも、現在元気に暮らしている。これらの地域における政府軍の行為は、我々のそれとは全く異なるものである。我が軍は罪のない人民の生活を守るために、これらの地域に留まっているのである。この事実は、人民が証明してくれるだろう。我が軍が行った公共または私有の建造物の破壊の大部分は、政府軍が4市町村に進入してきた際になされたものである。

政府軍へ

再度言うが、紛争は、政府軍の本質、本性を暴露するものである。無差別な抑圧、人権侵害、軍事的倫理と節操の欠如など。紛争地域での政府軍の婦女子虐殺は、軍統制のズサンさの表れである。我々は、政府軍幹部および軍兵士に対し、政府に服従しないようにと言いたい。出されている命令は、人民の虐殺や負傷者および捕虜の即決処刑を維持するためのものなのだから。そして諸君は軍事的倫理と節操の瀬戸際にいるのだ。我々は繰り返し言いたい。政府軍兵士たちよ、邪悪な政府軍を離れ、ただ人民のためだけに（それは自分たちでもわかってるように）我が軍に参加しようではないか。正義と共に生きるか、あるいは誇りと共に死ぬか、それだけを願って。我々は降伏した政府軍兵士や警察官の命を尊重して来た。政府軍が、負傷したり戦えなくなったり降伏したりしたサパティスタ戦士を即決処刑している時も。もし君たちが我々の家族たちに攻撃を開始したり、負傷兵や捕虜たちの命を尊重しないというのなら、我が軍もそれにならうことにしよう。

メキシコ人民へ

最後に働く者たち、貧農、教師、学生、進歩的かつ誠



オコシゴの山中をパトロールするE Z L N戦士たち
この周辺は現在も解放区である

実な知識人、主婦、職人、そして全ての政治的、経済的な自立的組織の方々、すでに始まっているこの闘争に参加してほしい。そしてあらゆる可能な面からのあなたたちの援助が、全メキシコ人民が切実に願ひ続けて来た正義と自由を勝ち取らせるのである。

我々は銃を置かない！

免罪や情けではなく、正義を！

メキシコ南東部の山岳地帯より

E Z L N総司令部先住民族地下革命委員会

(C C R I - G C / E Z L N) 副司令官 マルコス

1994. 1. 6

E Z L N総司令部 1.12声明

「心に希望を抱いて」

メキシコ人民へ！

世界の人民ならびに政府へ

兄弟姉妹たち！

本日（1994年1月12日）、連邦軍の最高司令官としてサリナス大統領が軍隊に停戦を命令したことを、我々は知った。国防省担当者は、（連邦軍は）現在の占領地を保持しながら、引き続き空陸からのパトロールを続け、我が戦士たちの（E Z L Nの）活動を妨げると付け加えた。

先住民族地下革命委員会-E Z L N総司令部（以下C C R I - G C / E Z L Nと略）は、サリナス大統領の決定を歓迎する。これは、2党（E Z L NとP R I）間の対話の開始に向けた最初の一步であると理解する。

C C R I - G C / E Z L Nの1月6日付声明によって提示された対話を開始するにあたっての4つの要求は、十分に満たされはしなかった。しかしながら、サリナス大統領の決定は、一つの始まりなのである。

以上をふまえて、サパティスタ叛乱兵士たち全ての最高指導部たるC C R I - G C / E Z L Nは、以下の通り命令する。

- (1) E Z L Nの各部隊部署に就く全ての正規軍、不正規軍、都市戦闘部隊は、現在占領下の駐屯地ならびに陣地にある連邦軍に対する攻撃作戦を一時中止せよ。
- (2) E Z L Nの全部隊は、現在の位置にとどまること。空陸を問わず連邦軍の攻撃を受けた場合は、決然と強固にこれに応じよ。
- (3) この声明の受領をもって、E Z L Nの攻撃的作戦の中止は実行されるだろう。そしてこれは、我々が賢明かつ必要であると見なす間、維持されるであろう。
- (4) 我々は、いかなることがあろうとも、邪悪な政府に武器を引き渡したり降伏したりはしない。停戦の目的は、戦闘地域での一般民衆の境遇を軽減することであり、そしてメキシコの進歩的かつ民主的な諸部門と対話のためのチャンネルを開くことにあるのだ。

我々の闘いは、公正かつ誠実なものである。この闘いは、特定の利害でなく、全メキシコの民衆そして、とりわけ先住民族の自由への欲求に応ずるものなのだ。我々は正義を求め、前進するだろう。なぜなら、我々の心の中には希望があるからなのである。

メキシコ南東の山々から

CCRI-GC/EZLN

1994.1.12

EZLN総司令部 1.13声明(1)

**「我々は、正義、尊敬、尊厳
をもった平和を求める。
膝を屈して生きることは、
もはやないだろう」**

メキシコ人民へ

世界の人民と政府へ

兄弟姉妹たち！

数日前、メキシコ南東部における現在の衝突の政治的解決に到達するための調停委員会を誰が構成するのかについて、幾つかの宣言書が発表された。全国紙「ヨルナダ」に掲載されたEZLNのものだとされる声明は、仲介者として、チアパスのサミュエル・ルイス・ガルシア司教、グアテマラの先住民族でノーベル平和賞を受賞したリゴベルタ・メンチュウ、『プログレッシブ』誌の主幹でジャーナリストのユリオ・シェレルを提案した。その他の意見や提案も耳にした。しかし、今現在まで、我々



サン・クリストバル・デ・ラス・カサスで、政府軍機を警戒するEZLN兵士

は意見を出してはいないのである。このため、この問題についての意見を述べる時であると考えている。

交渉委員会のメンバーは、EZLN-GCによって受け入れられるべく、以下の資格を満たさなければならない。

- (1)メキシコ生まれであること。我々がこれを要求するのは、メキシコ人の間の問題は、外国の干渉なしにメキシコ人によって解決されるべきだと信ずるからである。例え、それらの外国人が善良かつ誠実であってもである。
- (2)何らかの政治的党派に属してはならない。我々は様々な党派によって闘いが選挙目当てに利用されることを望まないし、我々の闘いの背景にあるものを、誤って解釈されるのも本意ではない。
- (3)現在の衝突に関して、厳正中立の立場を保持しなければならない。EZLN、連邦政府どちらの支持者であってもならないし、どちらかの党の構成員となることもできない。
- (4)我々の国を苦しめる深刻な社会問題、そして特に、メキシコに暮らす先住民族の困難な境遇に敏感でなければならない。
- (5)その誠実さと愛国主義があまねく認められる人物でなければならない。
- (6)武力衝突の威厳ある政治的解決を見つけるべく、努力を傾注することを公約しなければならない。
- (7)政府とEZLNの間の調停を行う民族調停委員会の形成に責任を負わなければならない。

CCRI-GC/EZLNは、サン・クリストバル・デ・ラス・カサスのサミュエル・ルイス・ガルシア司教が前述の資格に適合すると信ずる。そして我々は、宗教的な権威としてではなく愛国的メキシコ人として（これは宗教問題ではないからである）、彼が将来の民族調停委員会に加わるよう、正式に要請する。

衝突の政治的解決を見つけ出すための重要な使命を担う、この委員会の形成に適任な4人目の名前を、CCRI-GC/EZLNはメキシコ社会に尋ねる。もし、それらの人々がすでに述べてきた資格を満たしているなら、EZLNはその委員会への参加を歓迎するだろう。そして、最後まで親しみをもって彼らの言葉と心に耳を傾けるだろう。

メキシコ南東部の山々から

CCRI-GC/EZLN 1994.1.13

EZLN総司令部 1.13声明(2)

**「おしゃべりな口から
嘘はやってくる」**

メキシコ人民へ

世界の人民と政府へ

兄弟姉妹たちよ！

本日、1994年1月13日午後1時30分頃、連邦軍は、チアパス州オコシンゴ市、カルメン・パタテに近いEZLNの野営地を攻撃し、サリナス大統領の命じた停戦を破った。武装ヘリコプターと航空機の支援を受けながら10台の車両でやって来た連邦軍は、我が陣地に侵入しようとし、サパティスタの銃撃によって撃退された。連邦軍は、報復行使の目的で、あるいはサパティスタからの捕虜とすべく（かつておこなったと同様に）居住区近くの民間人の拘束を始めた。

昨日、EZLN総司令部は、サリナス大統領が連邦軍に停戦を命じたのに応えて、サパティスタ軍に停戦を命じた。我々は、我が兵士たちに、邪悪な政府の軍隊によって攻撃された場合を除き、非防衛的な攻撃を行ってはならないと命じたのである。すでに述べた一部の連邦軍兵士の攻撃の態度の実情は、メキシコ政府が衝突の政治的解決を求めているということを疑わしくしている。EZLNは対話への意向を繰り返すが、それを利用されようとは思わない。サリナス大統領がウソをついているか、または連邦軍が連邦機関の命令に従う用意がないのどちらかなのだ。

CCRI-GC/EZLNは、メキシコ人民ならびに世界の人民と政府に呼びかける。今日の事態が示すように、ウソ以外のなにものでもない政府宣言などに、利用されるようなことがあってはならない。

メキシコ南東部の山々から
CCRI-GC/EZLN
1994.1.13 メキシコ

EZLN総司令部 1.13声明(3) 「ビル・クリントンへ」

親愛なるアメリカ合衆国大統領ビル・クリントンへ
米国議会へ
合衆国の人々へ

皆さん

我々がこの手紙を送るのは、メキシコ連邦政府がチアパスの先住民族を虐殺するのに、アメリカの経済的、軍事的援助を使っているのを伝えるためである。

我々は、米国議会と合衆国市民が、麻薬取引と戦うこと、あるいはメキシコ南東部の先住民族の暗殺のための、この軍事的経済的支援を是認するのかどうか知りたい。兵隊、飛行機、ヘリコプター、レーダー、通信機、武器そして軍需物資は、麻薬取引業者と巨大麻薬カルテルを追うのに使用するために送られるわけではなく、まさに、メキシコ人民そしてチアパスの先住民族の正義の闘いを抑え込み、無辜の男女、子供たちを殺すのに使われているのだ。

我々は、外国の政府や人々、あるいは組織から何らの援助も受けてはいない。麻薬取引もしくは国内、国際を問わずテロリズムとは無縁である。途方もないほどに存

オコシンゴの山中にて



在する諸問題と不満に対処するために、進んで自らを組織したのだ。我々は長年にわたる虐待、ウソ、そして死に疲れている。我々は、自身の生存と尊厳のために闘う権利を持つ。我々はいつでも、戦争に際しての民衆を尊重する国際法規に従う。

アメリカ政府と人々は、連邦政府に与える援助によって、自らの手を先住民族の血で汚しているのだ。我々が熱望するのは、この世界の全ての人々の真の自由と民主主義である。我々は、この願いのために自らの生命をささげる用意がある。メキシコ政府の共犯者となることによって、あなたの手を血で汚してはならない。

メキシコ南東部の山々から
CCRI-GC/EZLN
1994.1.13 メキシコ

マルコス副司令官の書簡

全国紙『ラ・ヨルナダ』『エル・フィナンシエロ』、サン・クリストバル地方紙『エル・ティエンポ』へ。

1994.1.13

皆さん

率直に言おう。CCRI-EZLN総司令部は、国内外の報道機関にとって興味あるであろう一連の文書と手紙を提示して来た。私の仲間たちは、これらの文書が目的地に到達し、大衆に知られるようになる方法をみつけるよう私に頼んだ。これについて、むしろ私は、これらの文書をあなたたちの新聞に掲載するのは可能なのかと、あなたたちに問おう。

これらの文書は、1994年1月7日から13日の間に起こった出来事における我々の立場を示すものである。私は、それを明らかにしたいゆえに、これをあなたたちに届けるのだ。この文書の小包は、何日も山や谷を越え、我々を脅かす戦車や軍用車両、アーミーグリーン軍服を着た何千人もの兵士たち、そしてあらゆる戦争のための道具を避けて旅をしなければならない。彼らは、戦争とは兵器や武装した人間の数ではなく、政治力の問題なのだというのを忘れていて、

とにかく、これらの文書と手紙が、あなたたちのもと

へ届くには、何日か日数を要するのは事実である。もし届けばのはなしだが。

我々は健在であり、これらの文書の中で、我々はこの衝突の正しい解決を見出すための対話を実施することを繰り返している。と同時に、我々によって暴かれた不正や墮落を包み隠さんとする政府の軍事的配備の結果として、我々はいくらか身動きが取れないでいる。今求められている平和は、我々にとって不変の闘いとなっているのだ。

メキシコの権力者たちは、街でインディオが死に、街角は輸入品の包装紙が乱暴にまき散らされることによっていやというほど汚されているという事実、悩まされている。彼らはむしろ、インディオが良心や観光地からほど遠い山の中で死ぬことのほうを好む。そのようなことは、そう長くは続かないだろう。少数の幸福は、多数の苦痛に基づくことは出来ないはずなのだ。

良かれ悪しかれ、彼らはその「運」を分配せざるを得なくなっている。彼らには、自ら向きなおって省み、元々の居住者に対する国家の歴史的な不正義について、何らかの手立てをなす機会が前々からあったにもかかわらず、彼らはインディオを人類学の対象、観光物、使い捨ての存在としてのみ見なされている自由貿易協定と共に、幸運にも消滅することとなってしまった「ジェラシック・パーク」の一部としてしか見なさなかったのだ。ゆえに、メキシコにおいて、山中での死は数えきれないのだ。

連邦高級官僚から、墮落した「先住民族のリーダー」そして、チアパスの住民によって選ばれたわけではない知事、名誉職にあずかって、統治する民衆よりは権力者たちとの関係を強める市町村長、そして、これらの土地に暮らすあらゆる居住者の健康、教育、土地、家屋、福祉、仕事、食事、正義そして最も大切な尊敬や尊厳を認めない役人たち、これらは皆な有罪である。人間的尊厳は、基本的生活環境の与えられている者たちのみの権利ではなく、物や動物から区別する物質的な所有物、すなわち尊厳を持ち合わせていない者にもあるのだということを、彼らは忘れていたのだ。

しかし、この無区別な状況が支配する海のただ中では、不正義がもたらす貧困について語る声が、以前から、そして今もあることを認める必要がある。これらの声の中に、地方に、全国に実在する賢明なジャーナリズムがあったし、今もある。さて実際、我々は何故君たちにうんざりしているのか？君たちが仕事をさせてもらうために、連邦軍を信用しようとしてきたことで、多くの問題を抱えたはずである。要するに、我々の求めるものは、尊厳ある平和と正義なのだ。

連邦軍の戦車、飛行機、ヘリコプターそして何千もの兵士たちを、我々は恐れてはいない。彼らが我々に強制しているのと同じ不正義（道すらなく、基本的公共事業もない状態）は、今反対に彼らに対してふりかかっているのだ。

我々に道路は必要でない。何故なら、我々は常に小道を歩きまわっているからである。連邦軍全てを投入した

ところで、貧しき我々が使用し、今、我が叛乱勢力のもとにある、あらゆる小道を閉ざすことなど出来はしないだろう。

テレビによって造られ、報道機関のうちにあるウソは、我々にとっては何らの影響ともなりはしない。彼らは、チアパス州で読み書きの出来ない人の数を忘れているのではないか？この国において、電気もなくテレビもない家がどれだけあるというのか？もし国民が、これらのウソにだまされるとしても、彼らはいつでも、再び彼らを目覚めさせる準備のできている我々の仲間となるだろう。

CCRIは不滅である。敵の作戦以来、CCRIは兵隊登録を行っている。もし幾人かが倒れたら、別の幾人かが持場に就き、代わりの者が参加してくるだろう。我々を軍事的に拘束しようとするのならば、完全に我々の最後の1人まで全滅してしまわねば、その目的は達成されないであろう。もし彼らが、我々の内の1人でも取り逃がしたならば、それが、再び全土にわたる叛乱を開始するのではないかという疑いを抱き続けなければならないだろう。

私はこれ以上彼らを苦しめないだろう。

私は、『「混血」である副司令官マルコス』が「無辜の人々」にとって何ら迷惑となりえないことを望む。TV局テレビシアで放映中のヒット番組のメロドラマ「サベージハート」の主演ファン・ディアブロを捕まえてしまう役まわりの「混血」の割合は、2対1である。

質問があるのだが。「メキシコ人」は「チアパス」の代わりに「チアパス」といい「セツァレス」を「ツェルタレス」と言うのだろうか？

健康と幸運を。もし、まだ余地と方法があるのならば。
叛乱軍-副司令官 マルコス



PRI（制度的革命党＝政権党）の建物を占拠し警戒に立つEZLNの女性部隊

E Z L N副司令官マルコス・インタビュー

このインタビューは、E Z L Nの蜂起初日に、サン・クリストバル・デ・ラス・カサスで、アメリカのフリージャーナリスト、ロバート・オヴェーツによって行われたものである。会話は英語でなされ、マルコス副司令官は英語に堪能ではないために、若干不明瞭な点があることを了解して頂きたい。

ROBERT OVETZ（以下略“O”）：ついにあなたがたはメキシコ政府に対して武力闘争を開始したのですね？

Sub-Commandante MARCOS（以下略“M”）：そうだ。

O：メキシコ各地で、またはこの周辺だけなのですか？

M：メキシコ中で、それが今始まったのだ。

O：では今日が開戦日ですね？

M：そうだ、大統領カルロス・サリナス・デ・ゴルタリ政府に対する全国同時革命のだ。とにかく我々は4つの都市から始めた。

O：その4つの都市とは？

M：アルタミラノ、オコシンゴ、マルガリータス、そして、サン・クリストバルだ。

O：それらの都市は山の中にあるのですか？

M：オコシンゴはラカンドンのジャングルにあり、マルガリータスはその近くだ。それから、アルタミラノはここから40キロ離れたところにあり、すべての都市が山の近くに位置している。

O：つまり、山は戦略的重要性をもっているのですね。

M：そうだ。都市の周りを囲むようにあるからだ。

O：もし政府軍がやって来たらどうするのですか？もうどこかに行ってしまったが、少し前に空軍の飛行機が飛んでいるのを見かけました。彼らがここに入ってくるのは容易ではないでしょう。

M：我々も、そう思っている。だがここには多くの市民がいるから、いずれは入ってくるだろう。

O：たくさんアメリカ人とか…それでアメリカ軍もやってくるにちがいない。

M：…しかしインディオが殺され、アメリカ人、ヨーロッパの人々、いや、彼らは殺されることはない。だがインディオたちは、そう、彼らは殺されんだ。

O：私はスペイン語で書かれたものをほとんどまったく読めないで、もしできるならばあなたがたが要求していることとFZLN [正/E Z L N] について話してくれませんか。

M：戦争宣言のことか？

O：そうです。

M：それは、メキシコの最高法規、憲法にある「人民はいつなんどきにおいても、どのようなやり方でも政府を変える権利がある」という条文にのっとって、この戦い、武装闘争を始めたのだ。

O：その法を、アメリカにもとりいれたいぐらいだ！

M：これは憲法の第39条にあたるんだが、もう我々は政



マルコス副司令官

府に対して何も期待はしていないし、平和主義者なんて何の役にもたない。だから我々がこの権利を実行するまでだ。

O：カルデナスの選挙の時のように？

M：その通りだ。

O：彼らは汚いやり方でそれを…

M：コロシオの選挙は最悪だ。[PRI（制度的革命党）の大統領候補者＝ルイス・ドナルド]

O：それは誰ですか？

M：コロシオはPRIの候補者だ。

O：ああ、新しい候補ですね。

M：そう新しい候補者だ。誰であれ、このメキシコには自由もない民主主義もないんだ…先住民族に至っては最悪の状況だ。

O：アメリカ軍があなたがたを一掃するためメキシコに侵攻してくることはありえるのですが…彼らは今までに何度もそういうことをしてきました。

M：私はそうなるとは思わない。今まではキューバにソビエトがいたから…いや、今でもアメリカ人は国境をこえて侵略されると考えている。しかし誰が？火星か？ソビエトはもはや存在しないんだ。彼らはこのメキシコのこの闘争を理解し、尊重すべきだ。妨害するのはもってのほかだ。我々はアメリカに対して要求しているのではない。要求は憲法にある土地の分配、いやそれだけでなく家や、牛乳、健康な生活、教育、そして民族独立だ。

O：あなたはメキシコ政府を打倒するつもりですか？

M：なんだって？

O：あなたは新しい政府をつくらうと思っているのですか？

M：そうだ。

O：新しい政府はどういったもので、どうやってそれを実現するのですか？

M：我々は現政府が否定されるべきだと考えている。

O：つまり粉砕されるべきだと？

M：それで人民は、暫定政府を樹立しなければならない。この政府が自由と民主主義の名の下に新しい選挙をおこなう。

O: どうやって臨時政府は作られ、または誰がそれを担うのですか?

M: その方法は、まずサリナス・デ・ゴルタリ政権の否定を要求することだ。様々な政党が暫定新政府を支える。この政府は…手始めにすべての人が解放され、つまり自由に選挙を行う。それから、我々の要望は…そんなところだ。機会は平等に与えられなければならない、いまずぐというわけには行かないが、しかし現時点では少なくとも制度的革命党以上には機会を与えられるべきなのだ。この国においてはとにかく先住民民族は最悪の状況におかれている。

O: E Z L Nは、既成の組織からつくられたのですか?

M: 違う、神に誓って、神に誓っても違う。そういったものとは違う、この運動は自然発生的なものだ。

O: それでは、ほとんどの先住民民族がE Z L Nに関わっているということですか?

M: そういうことだ。大半はチアパスの者だ。しかし他の州にも様々な民族がいるが。ここチアパスにはツォルタル、ツォツィル、ツォケ、チョシヴァリス、ソケマ(?)がいる。

O: あなたは、サン・クリストバルは解放区であると考えているのですか?

M: いや、ただ注意を引くためだ。

O: なんて言いました?

M: メキシコだけでなく世界中の人々の注目を引き、先住民民族が誇りをもって立ち上がったということを知ってもらうためだ。

O: なるほど、誇りをもって彼等が立ち上がったと。

M: そうなのだ。私の英語の言い方が正しいかよくわからんが。

O: 大丈夫ですよ。ところで、あなたはこういった位置にあるのですか。

M: 私は兵士だ。

O: あなたは……

M: 兵士だ。この部隊の副司令官だ。部隊には大尉、少佐、中尉、中佐がいる。

O: だれが…つまり、将軍、いやもしくは司令官にあたる人はいるのですか。

M: 最高司令官が、人民を召集してあそこにいる。(E Z L Nによって占拠された市庁舎を指差しながら)

O: ああ、あのビルのところにね。

M: そうだな。これは人民のグループだ、集産体をめざすという意味でだ。

O: 今日行動を起こした各都市のグループはお互いに独立したものなのか、それとも皆関係があるのですか?

M: お互いに同意を確認している。

O: 同意とは?

M: ツォルタル、ツォツィル、チョシヴァリス(?)との間でのことだ。

O: この十年間、エルサルバドルやニカラグアのように武力闘争が起こった場合、いつも北アメリカではそれを支援するような運動がありました。今回、私たちアメリカの人々は君たちの支援のために何をしたらいい



のでしょうか?

M: NAFTAだ! NAFTAに対する革命だ! アメリカには、そうだ、君たちがチカーノと呼んでいるが、多くのメキシコ人が住んでいる。つまり、ロサンゼルス、サンディエゴとか、ほかにもたくさんの所にいる。そこにはもう一つのメキシコがあるのだ。

O: アメリカ南西部全体においてそうですね。

M: そう、我々は彼らに伝えたい……

O: 彼らに何を?

M: 彼らに、ここ、メキシコに存在するあらゆる抑圧、そして搾取状態、屈辱を思い起こさせる。それらが彼らをアメリカに向かわせることになってしまったのだ。もし人々が、このメキシコで土地を持ち、家族とともに、ずっと長く、まあ、せめてアメリカ並みの生活をしているなら少しは幸せと思うかもしれない。我々はこの闘争を彼らの共感を得るために広めなければならない。魅力のあるというか…どう言ったらいいんだ。共感を持つことだ。レイブしたり白人共を殺すことを望んでいるのではない。君はそんなこともうわかっているだろう。(インタビュアーの肩をたたきながら)

O: うーん、ちょっとわかりにくい。

M: つまり、彼らのしたいことは、ただ土地を持っていけないがために土地を要求しているということだ。ここにいるすべての人々、つまり先住民民族たちは土地を持っていない。どうやって生きていくことができるんだ?

O: それにNAFTAがあっては、今土地を持っている人も、すぐに土地を失ってしまうでしょうね。

M: もういい、十分だ! NAFTAっていうのは人民を抹殺するあの飛行機が持っている爆弾みたいなもんだ…(頭上を飛び回っている軍のジェット機をさしながら) そうね、この94年1月1日にNAFTAが始まる、多くの人民が死んでいく。どうしてだ! どうしてこの日に人民の解放が始まらないんだ! だから人民は決めたんだ、今、解放のための戦いをすると。

O: あなたが影響を受けた人はだれですか?

M: サパタだ。

O: サパタですね?

M: サパタ、そうだあのエミリオ・サパタは農夫だった。

うーん、まあ小さな農夫、つまり…

O: 農民のことですか?

M: …農民……武力蜂起を起こした。それがここにいる人達が共に再び戻る可能性である。それで、私は今ここで言いたい…今ここで…言いたい。彼はそのため武器を手にとったのだ。

O: つまり、この戦いはある種の終わることのない、いわばサパタの終わりのなき革命が続いているということですか?

M: そういうことだ。憲法第27条の改悪。

O: …それはなんですか?

M: …カルロス・デ・ゴルタリ案だ。過去に、土地を求めている小作人に与える大地はあった。

O: どういった人にですか?

M: 土地を欲している人、我々は土地を必要としているのだ

O: あー、土地の再分配ですね?

M: 現在は無理だ。だが我々はもっと領域があることを知っている。

O: 領域?

M: 領域、つまり広大な土地所有者の持っているものだ。

O: ああ、それはほんの一部の人が広大な土地を所有していることをいっているのですか?

M: そうだ、そのことだ。ほとんどの人が一握りの土地さえもっていないし、持っていたとしてもそれは劣悪なもので何も育たないようなところだし、農産物の流通は滞り、人々の暮らしはますます苦しくなっているのだ。人間らしさ以前の状態にチアパスの先住民族はいるのだ。今だメキシコには金持ち、中産階級、貧民階級が存在する。しかし最も貧困な人々はいつも先住民族なのだ。君が知っている以上にひどいのだ。

O: 世界中にいる先住民族も同じような境遇にありますね。

M: そうだ。そしてもう一つ、先住民族は、チアパス州、タバスコ州だけでなく、他の州、ベラクルス、オアハカ、チワワ、プエブラにもいる。彼らは考え始めた、自らの境遇を改善しようと多くのことを始めたのだ。

O: FZLN「EZLN」にはいったい何人の先住民族が関わっているのですか? 先住民族によって指揮されているのですか?

M: 我々はE. Z. L. N. だ。サパティスタ・民族・解放・軍だ。君はサンディニスタ民族解放戦線と言っているぞ。

O: ああ、すみません。

M: もちろんFZLN (FSLNのこと) は、今もある。しかし我々はサパティスタ民族解放軍だ。南西部には多くの先住民族がいて、まあほとんどが南西部にいるが、彼らが関わっている。

O: なにがですか?

M: 先住民族がだ。

O: 彼らの組織があると?

M: 違う。地域のことだ。(訳註・direction はスペイン語で場所の意味が強いために行き違い)

O: ああ、指導する人のことですね。(訳註・「導く」という英語の意味から想像している)

M: リーダーは南東部の先住民族だ。他の州の者がいるかどうかはわからないが、チアパスにはツォツィル、マルガリータスにはツォルタルがいる。各々の先住民族の代表者がこの軍の全体の指導者となっている。まあ、我々は武力闘争だけでなく、もっといろいろな闘争の仕方を考えている。他にもいいやり方が。

O: というと?

M: えー、マニフェスタシオン…というか、

O: マニフェスタシオン? それはどういう意味ですか?

M: そうだなー、武力を使わない闘争だ。

O: 大衆で…デモのことですね。

M: デモンストレーション、人民の動員。だが武力を用いずにだ。自分たちの要求を政府に突きつけ、満足いく回答を出させるためだ。しかしそれはもはや不可能だ。もう一步踏み込んだやり方が必要なのだ、それによってすべての先住民族が土地を所有する権利を持つまで。アンテス…どう言うんだ、昔は、このメキシコと呼ばれている土地は彼らのものだったんだ。

O: 何千年もの間ですね。

M: ここは私の土地であり、私はこの地の持ち主であり支配者なのだ。しかし、白人の支配者を好む者はそう居ない。人民の上に立つのではなくすべての人民がこの土地の主人なのだ。これが彼らの持っている考え方だ。もし君がツォツィル語を学ぶ機会があって、彼らと話すようになれば、彼らの中にも人類の偉大な哲学を発見するだろう。それは、もし彼らが手にナイフを持っていたとしても変わらない。

O: 手に何を?

M: 手にナイフを、今日の私たちと同じのだ。我々は人を殺さない。白人女性をレイプもしない。しかしもし、連邦軍がここにやって来て先住民族の女性を犯し、殺すことがあったならば我々はこの武器を使うことになるだろう。

O: グアテマラで起こったようなことですね。

M: その通りだ。我々は軍隊だ。人民にとってよりよい存在だ。なぜなら、

O: あなたは軍隊とみなしているんですね?



サン・クリストバル・デ・ラス・カサスで政府軍機を警戒するEZLN戦士たち

M: もちろんだ、そうであると思っている。
 O: いったい何人が闘争に関わっているのですか?
 M: ここでか?
 O: いや、今日、行動を起こしている全てを含めてです。
 M: 今日の行動? ここで、
 O: いやいや、4ヵ所すべてです。
 M: さあ、それは話せない。
 O: ああ、知らないのですね。
 M: 今日、ここには1000人ぐらいがいる。
 O: 1000人…ここだけで1000人、というとはかの都市にもっといって。
 M: あの飛行機が見えるか? (頭上を旋回しているジェット機を指して)
 O: ええ、見えます。
 M: うん。降下している。降下して右旋回して、コミタンへ行くのか、ツクストラか…たくさんの人民がいるのだ。
 O: 組織の人々ですか?
 M: 解放政府を防衛する人民がいる。どう言えば。それらの人民…
 O: ああ、彼らは今、山で闘っているのですね?
 M: 違う。違う。道路とハイウェイを封鎖しているだけだ。
 O: そうですか。だから、我々は…今は街を出て行ける人はいないわけですね。
 M: 誰もだ。

前進するトルコの左翼運動

民主党(親クルド、DP)は、トルコ東南部の選挙で躍進すると予想されている。これに対して、トルコ政府は党の活動を禁止して妨害を加えようとしている。民主党の前身である人民労働党は、同じく禁止処分に出ている。

1月29日は、トルコ共産党の創設者ムスタファ・スプヒをトルコ政権が暗殺して73周年にあたる。社会主義権力党(SIP)はイスタンブールのオルタコ文化センターで記念集会を行った。同党は、昨年9月、クルド人の民族自決を支援しているとして活動禁止となったトルコ社会党(STP)の元メンバーらによって設立された新党である。

SIP議長アイデミル・グラールは、この集会で先のトルコ軍によるジレ爆撃を非難し、クルド解放闘争への連帯を宣言した。演説の後には、トルコやクルドの革命歌が流され、若い男女の多い参加者たちは、赤旗を打ち振りスローガンを叫んだ。

「革命と社会主義万才!」「クルディスタンをファシズムの墓場に!」「社会主義のトルコを!社会主義のクルディスタンを!」

若き社会主義者たちは、トルコ共産主義運動の歴史についてのスライドを見、イズミール刑務所からの5人の同志たちのアピールに聞き入った。彼らは、1月13日の公務員ストに際して、政府が賃上げを拒否するのはクル

ディスタンでの戦争経費のためだと主張するリーフレットを配付したために入獄している。

キューバ共産党からの連帯の挨拶は、「社会主義キューバ万才!」という感動的な歓呼で迎えられた。

トルコ軍、イラク領内のクルドの村を越境爆撃

1月29日の朝、トルコ空軍はクルディスタンの村、ジレを爆撃した。使用されたのは、アメリカから供給されたF-16戦闘爆撃機で、もちろん投下された爆弾もアメリカ製である。イラン国境に接する北部イラクの村であるジレは、徹底的に破壊された。負傷者の数は未だに不明である。

爆弾は、イラン領内の村にも落ち、9人の農民が死亡した。イラン政府は、この攻撃に抗議した。

トルコ首相チルレルは、ジレはクルド労働者党(PKK)の基地であると主張している。一方、クルド人民の独立闘争を指導するPKKは、部隊に被害はなく、2機の戦闘爆撃機を撃墜したと報告している。

ジレへの攻撃は、クルド人民に対するトルコ政府の民族抹殺戦争の一環として、ペンタゴンの全面的協力のもとに行われた。この村は、アメリカ軍が実施しているイラク北部の飛行禁止空域にある。トルコ領内の基地を使用して、アメリカ軍は絶えずこの空域をパトロールし、発見したイラク軍機を攻撃しており、例えトルコ軍機と言えども、この空域の飛行にはアメリカ軍の許可が必要なのだ。昨年11月にアメリカ大統領と会談した際、チルレルは、クルディスタンの偵察衛星写真をトルコ軍に提供することを要請して承諾を受けている。つまり、今回の越境攻撃は、アメリカの全面的な支援を受けたものであったわけである。アメリカ政府は、トルコ政府のクルドへの民族抹殺戦争の共犯者としての姿をあらわにしつつある。

世界革命運動情報



★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

大阪2-252923 ARP

本号 300円